夏目漱石、和歌山めぐり（明治 44 年）

夏目漱石はかなりの回数、関西を訪ねています。その中で今回は明治44年8月の大阪朝日新聞社主催の講演会で明石、和歌山、堺、大阪を訪ねた足跡を辿る。参考図書は主として「漱石全集　第十三巻」の日記と、「漱石全集　五巻」、年譜を参考にしました。

年譜、明治44年8月からです。

8月 11 日　大阪朝日新聞主宰の講演会のため東京を出発した。十日発の予定であったが、台風で鉄道が不通になり予定を遅らせた。

8月 12 日　箕面の朝日倶楽部に泊まった。

8月 13 日（日）　明石の公会堂で『道楽と職業』と題した講演を行なった。

8月 14 日　電車で和歌浦に出て、エレベーターに上ったり、紀三井寺に参詣したりした。

8月 15 日　新和歌浦を見物した後、奠供山で『現代日本の開化』と題して講演を行なった。固辞した講演後の宴会に出るが、風雨はげしく漱石らは和歌浦に戻らず新和歌浦に泊まった。

8月 16 日　大阪に戻った。

8月 17 日　堺の市立高等女学校講堂で『中味と形式』と題した講演を行なった。

8月 18 日　大阪の中之島公会堂で『文芸と道徳』と題した講演を行なった。講演後、宿舎の紫雲楼に戻ったところ、「宿屋で寝てゐると何も食んのに嘔吐を催ふしてとうとう胃をたゞらして夫から血が出ましたので驚ろい」たと。後に回顧した《書簡》。…

8月 19 日　大阪朝日新聞社の紹介により、大阪市東区の湯川胃腸病院に入院した。《鏡子》

8月 21 日　鏡子が東京から駆けつけた。《鏡子》《荒》…

9月 14 日　十三日に大阪を発ち、この日帰京した。《荒》…

上記の年譜は大阪朝日新聞社主催の講演会で明石、和歌山、堺、大阪を訪ねた項目以外は省いています。

8月13日から8月18日で講演は終っているのですが、漱石の持病である胃の病気が再発し、大阪で約一ヶ月入院しています。そのため帰京が遅れ、9月に東京に戻っています。

年譜内容に関しては、一部、日記との相違が見受けられます。

8月 12 日　箕面の朝日倶楽部に泊まった。　→　日記では明石の「衝濤館」に宿泊

8月 15 日　…風雨はげしく漱石らは和歌浦に戻らず新和歌浦に泊まった。　→　本町

の富士屋旅館に宿泊

現　和歌山市駅

＜和歌山駅＞

漱石は明治44年8月14日、大阪市北区今橋の「紫雲樓」を発ち、和歌山に向います。当時、大阪から和歌山に向うには、明治36年（1903）に開通した難波ー和歌山（現　和歌山市駅）の南海鉄道しかありませんでした。国鉄（JR）の前身である阪和電気鉄道が天王寺ー東和歌山（現　和歌山駅）間を開通させたのは昭和5年（1930）となります。当時の和歌山駅は現在の紀和駅です。

「漱石全集　第十三巻」の日記（明治44年）からです。

「〔八月〕十四日〔月〕 快晴

九時五十二分の汽車で和歌山に行く事にする。和歌山からすぐ電車で和歌の浦に着。…」

南海鉄道の難波ー和歌山（現　和歌山市駅）間は1時間50分、特等車両を連結していたようです。漱石が前日宿泊したのが今橋の「紫雲樓（心斎橋通り）」だったので、難波は比較的近くて乗車には丁度良かったのではないかとおもいます。

夏目漱石の「行人（こうじん）」にも和歌山が描かれています。

「　　十

翌日朝の汽車で立った自分達は狭い列車のなかの食堂で昼飯を食った。「給仕がみんな女だから面白い。しかもなかなか別嬪がいますぜ、白いエプロンを掛けてね。是非中で昼飯をやって御覧なさい」と岡田が自分に注意したから、自分は皿を運んだりサイダーを注いだりする女をよく心づけて見た。しかし別にこれというほどの器量をもったものもいなかった。

母と嫂は物珍らしそうに窓の外を眺めて、田舎めいた景色を賞し合った。実際｜窓外の眺めは大阪を今離れたばかりの自分達には一つの変化であった。ことに汽車が

海岸近くを走るときは、松の緑と海の藍とで、煙に疲れた眼に爽かな青色を射返した。木蔭から出たり隠れたりする屋根瓦の積み方も東京地方のものには珍らしかった。
…
…
　停車場を出るとすぐそこに電車が待っていた。兄と自分は手提鞄を持ったまま婦人を扶けて急いでそれに乗り込んだ。
　電車は自分達四人が一度に這入っただけで、なかなか動き出さなかった。
「閑静な電車ですね」と自分が侮どるように云った。
「これなら妾達の荷物を乗っけてもよさそうだね」と母は停車場の方を顧みた。
　ところへ書物を持った書生体の男だの、扇を使う商人風の男だのが二三人前後して車台に上ってばらばらに腰をかけ始めたので、運転手はついに把手を動かし出した。
　自分達は何だか市の外廓らしい淋しい土塀つづきの狭い町を曲って、二三度停留所を通り越した後、高い石垣の下にある濠を見た。濠の中には蓮が一面に青い葉を浮べていた。その青い葉の中に、点々と咲く紅の花が、落ちつかない自分達の眼をちらちらさせた。…」

「行人」の内容は漱石の日記の内容そのものですね。「行人」は漱石が大正元年（明治45年）（1912）12月6日から翌年11月5日まで「朝日新聞」に連載された新聞小説です（4月から9月まで、病気のため中断しています）。和歌山を講演旅行で訪ねた翌年になります。日記も「行人」も和歌山市駅前から電車に乗っています。当時は和歌山水力電気株式会社が和歌山市駅－県庁前（後の市役所前）－和歌裏口－紀三井寺間（明治42年開業）を路面電車で運行していました。今で言う市電です。当時の軌道を下記の地図に記載しておきます。

「望海楼跡」

＜望海楼＞

　漱石は和歌山市駅到着後、路面電車で和歌浦に向います。約6．5Kmの距離です。

夏目漱石の和歌山に関しては和歌山県立文書館発行の「文書館だより 第31号 平成23年7月 ”漱石が見た百年前の和歌山”」がたいへん参考になりました。

「漱石全集 第十三巻」の”日記”（明治44年）からです。
「〔八月〕十四日〔月〕 快晴
九時五十二分の汽車で和歌山に行く事にする。和歌山からすぐ電車で和歌の浦に着。あしべやの別荘には菊池総長がゐるので、望海楼といふのにとまる。晩がた裏のエレベーターに上る。東洋第一海抜二百尺とある。岩山のいたゞきに茶店あり猿が二匹ゐる。キリといふ宿の仲居が一所にくる。裏へ下り玉津島明神の傍から電車に乗って紀三井寺に参詣。牧氏と余は石段に降参す、薄暮の景色を見る。
晩に白い蚊帳を釣り明け放して寝る夫でも寝苦しい。朝起
　涼しさや蚊帳の中より和歌の浦」

漱石の和歌浦での足跡を辿ってみます。先ず、路面電車を和歌浦停留所で降りて、「あしべや」に向っています。「あしべや（芦辺屋）」は江戸時代からの旅館で、昭和初期の絵はがきには「望海楼支店 あしべや」と書かれています。漱石一行は「あしべや」をパスしてすぐ横の「望海楼」に宿泊を切り替えています。その後、東洋一というエレベーターで裏山に上り眺望を楽しみます。そして紀三井寺に向い、長い階段を登って本殿にたどり着いています。

「絵葉書 望海楼」

同じ場面を夏目漱石の「行人」から見てみます。
「… 和歌山市を通り越して少し田舎道を走ると、電車はじき和歌の浦へ着いた。抜目のない岡田はかねてから注意して土地で一流の宿屋へ室の注文をしたのだが、あいにく避暑の客が込み合って、眺めの好い座敷が塞がっているとかで、自分達は直に俥を命じて浜手の角を曲った。そうして海を真前に控えた高い三階の上層の一室に入った。
そこは南と西の開いた広い座敷だったが、普請は気の利いた東京の下宿屋ぐらい

なもので、品位からいうと大阪の旅館とはてんで比べ物にならなかった。時々｜大一座でもあった時に使う二階はぶっ通しの大広間で、伽藍堂のような真中に立って、波を打った安畳を眺めると、何となく殺風景な感が起った。…
…

十六

朝起きて膳に向った時見ると、四人はことごとく寝足らない顔をしていた。そうして四人ともその寝足らない雲を膳の上に打ちひろげてわざと会話を陰気にしているらしかった。自分も変に窮屈だった。
「昨夕食った鯛の焙烙蒸にあてられたらしい」と云って、自分は不味そうな顔をして席を立った。手摺の所へ来て、隣に見える東洋第一エレヴェーターと云う看板を眺めていた。この昇降器は普通のように、家の下層から上層に通じているのとは違って、地面から岩山の頂まで物数奇な人間を引き上げる仕掛であった。所にも似ず無風流な装置には違ないが、浅草にもまだない新しさが、昨日から自分の注意を惹いていた。…」

ここでも日記と「行人」は同じです。漱石がエレベーターで登った山は奠供山で、現在は玉津島神社から登ることができ、山頂には「望海楼の記念碑」があり、エレベータの痕跡もあります。

夏目漱石の和歌浦地図

「県会議事堂跡」

＜県会議事堂＞

　和歌山に到着した翌日の8月15日、午前中は新和歌浦を観光し、その後、講演のため和歌山の県会議事堂に向います。

「漱石全集　第十三巻」の日記（明治44年）からです。

「〔八月〕十五日〔火〕 早車で新和歌の浦に行く長者議員某氏の招く所といふ。トン

ネル二つ。運動場といふのは砲台の出来損の如し。帰りに権現様に上る。橋の所に乞食が二人ゐる。石段は一直線で三にしきる。夫から片男波を見る。稀らしく大きな波が堤を越えてくる。電車で和歌山へ行く途中から降る。県会議事堂は蒸し熱い事夥し。…」

新和歌浦では第一トンネルと、第二トンネル、運動場を見ています。当時の第一トンネルは廃止され新トンネル変わっています。第二トンネルも廃止されて、丘越え道路に変わっています。その後、権現様、片男波海岸、を見ています。

午後1時からの講演内容
・海に行け：後醍院廬山
・清国における列国の利害関係：牧放浪（牧巻次郎、大阪朝日新聞記者）
・現代日本の開花：夏目漱石
大阪朝日新聞記者の講演タイトルが時勢を繁栄しています。ただまだ明治時代です。
講演の記録
「　はなはだお暑いことで、こう暑くては多人数お寄合いになって演説などお聴きになるのは定めしお苦しいだろうと思います。ことに承れば昨日も何か演説会があったそうで、そう同じ催しが続いてはいくらあたらない保証のあるものでも多少は流行過の気味で、お聴きになるのもよほど御困難だろうと御察し申します。が演説をやる方の身になって見てもそう楽ではありません。ことにただいま牧君の紹介で漱石君の演説は迂余曲折の妙があるとか何とかいう広告めいた賛辞をちょうだいした後に出て同君の吹聴通りをやろうとするとあたかも迂余曲折の妙を極めるための芸当を御覧に入れるために登壇したようなもので、いやしくもその妙を極めなければ降りることができないような気がして、いやが上にやりにくい羽目に陥ってしまう訳であります。…
…
もっとも私がこの和歌山へ参るようになったのは当初からの計画ではなかったのですが、私の方では近畿地方を所望したので社の方では和歌山をその中へ割り振ってくれたのです。御蔭で私もまだ見ない土地や名所などを捜る便宜を得ましたのは好都合です。そのついでに演説をする――のではない演説のついでに玉津島だの紀三井寺などを見た訳でありますからこれらの故跡や名勝に対しても空手では参れません。御話をする題目はちゃんと東京表できめて参りました。…」

講演の最初のみ記載しました。

当時の県会議事堂は、現在根来寺に移設され、根来寺一乗閣となっています。

「風月跡」

＜風月＞

漱石は県会議事堂での講演の後、「風月」という料亭に向います。

「漱石全集　第十三巻」の”日記”（明治44年）からです。

「〔八月〕十五日〔火〕 …

…

宴会を開くといふから固辞しても聞かず、已を得ず風月といふのに赴き離れで待ってゐる。宴開くる頃から風雨となる。隣席の綿ネル商　望海楼は危険だといふ。舞妓の踊と和歌山雲右衛門の話を聞いて外へ出ると吹降りである。…」

漱石本人は行きたくなかったようです。旅館で休んでいる方が良かったのでしょう。

夏目漱石の和歌山市中心部地図

南海電鉄
難波方面
JR天王寺方面
JR和歌山線
奈良方面
紀和駅
(旧 和歌山駅)
紀伊中之島駅
路面電車跡
和歌山市駅
富士屋旅館跡
風月跡
和歌山駅
(旧 東和歌山駅)
中央郵便局
(旧県会議事堂跡)
和歌山城
JR紀勢線
新宮方面
和歌浦方面

「富士屋旅館跡」

＜富士屋旅館＞

８月１５日の公演後、漱石は嵐のため「望海楼」に戻れなくなり、近くの旅館に泊ります。

「漱石全集　第十三巻」の”日記”（明治４４年）からです。

「〔八月〕十五日〔火〕…

…

隣席の綿ネル商　望海楼は危険だといふ。舞妓の踊と和歌山雲右衛門の話を聞いて外へ出ると吹降りである。西岡君は三度も電話をかけて大丈夫かと聞いたら大丈夫と云ふ。牧君にどうしませうかと云ふと牧君は夏目さんどうしませうといふ。北

＊　〔原〕

尾君がこちらが宜しいでせうと云ふ。後醍院君は是非和歌の浦迄行くと主張する。余等三人はあとの

〔速〕

西岡、後醍院、早記のＯＯ君と和歌の浦に向ふ。余等は富士屋といふのに入る。電燈が消える。ランプを着ける。其ランプが又消える。惨憺たる所へ和歌の浦の連中が徒歩で引き返す、車で紀伊毎日の所迄行って電車を待ってゐると電車は来るには来るが向へ行くのは何とかの松原迄で其先は松が倒れ

’　〔原〕

て行けないといふ。何時〔迄〕待っても埒が明かないので帰って来たといふ。西岡君は今望海楼が今夜中持つか持たぬかゞ疑問だといふ。是は電話をかけても通じないからだといふ。所が富士屋から電話をかければ望海楼へよく通じる。風雨鳴動のうちに愈十六日となる…」

明治４４年（1911）８月の気象庁のデータを見ると降水量のみが分かり、１５日は5．8mm、１６日は54．４mm、時間帯別に見ると、１５日は１５－１８時1．０mm、１９－２２時2．７mm、２３－２時（１６日）１７．３mm、３－５時３５．９mm なので、１６日の夜半が雨が激しかったようです。